

受領No. 1692

「公害遺産」概念の提案：水俣・百間排水口問題を起点として

代表研究者 林 美帆（岡山理科大学 教育推進機構 基盤教育センター 准教授）

共同研究者 除本 理史（大阪公立大学大学院 経営学研究科 教授）

Proposing the Concept of “Pollution Heritage”: Based on an Example of the Hyakken Drainage Outlet in Minamata

Representative Miho Hayashi (Associate Professor, Center for Fundamental Education, Institute for the Advancement of Higher Education, Okayama University of Science)

Collaborator Masafumi Yokemoto (Professor, Graduate School of Business, Osaka Metropolitan University)



研究概要

本研究では、2023年に起きた熊本県水俣市の百間排水口撤去問題を起点として、「公害遺産」という概念を提案することにより、公害の経験を継承するうえで不可欠な資料や遺構の保存・活用方針に関する基本的な考え方を確立することをめざす。

公害は科学技術発展の「負」の側面として生じた。その教訓を将来に受け継ぐには、遺構や資料を保存・活用することが不可欠である。百間排水口は、企業が水俣病の原因物質を排出した「加害の象徴」というべき場だが、土木技術史的な価値があるわけではないため、公害事件の重要な遺構であるという意味づけをしなければ、保存の根拠を提示することは困難である。

しかし日本では、原爆ドームのような例外的事例を除き、文化財の「価値」に公害などの「負の歴史」を含めるのは一般的ではない。これに対して本研究では、ヘリテージ（遺産）化に関する参照すべき先行事例の検討などを通じて、文書・モノ資料や無形の遺産なども含む包括的概念として「公害遺産」という考え方を提案し、この隘路を開くことをめざす。水俣病「公式確認」から70年を迎える2026年に、水俣現地でワークショップなどを開催し成果を発信したい。